

< 研究報告 >

日本の先祖祭祀と仏教

橋口豊彦

近年、日本の寺院の多くが檀家の寺離れと、葬儀形式の多様化によって、将来的な存続の危機に直面していると言われている。古来、日本の文化と日本人の精神性に大きな影響を及ぼしてきた日本の仏教が、今改めてその在り方を問い直さざるを得ない時期に来ていると言えるのかもしれない。

現代の日本人の多くが、仏教と聞いて連想するのは葬式や法事であろう。つまり、葬式や法事の時ぐらいにしか僧侶や寺院に触れる機会がなくなりつつあるということである。その状況の中で、葬儀や先祖の墓を寺に依存しない傾向がつついているのである。

また、戦前・戦後の混乱期において、急速に勢力を伸ばしてきた仏教系の新宗教の諸団体も現在では一時の勢いを失いつつある。

本来、葬送儀礼や先祖祭祀の伝統と仏教とはその起源を異にするものであったはずである。それが、日本において如何にしてその両者が結びつき、今日のように葬送儀礼や先祖祭祀が仏教の代名詞のようになってしまったのか。

また、上記の仏教系の新宗教の多くが標榜し、それが大衆をひきつける要因ともなった在家による先祖の供養という側面の受容のされ方とその問題点。

本論考は、日本における、そのような葬送儀礼を含めたいわゆる先祖祭祀のあり方が日本古来の祖先崇拜というある意味で不動の枠組みの中でのみ展開し、仏教もその手立てとして有用な部分だけが受容され、仏教本来の教えや目的は未だに日本には普及していないし理解もされていないという事実を概観する。

そして、日本の仏教は如何にすればそのような日本古来からの祖先崇拜の枠組みから脱皮し、本来の仏教としての目的や教えを日本の社会に広く普及していくことが出来るのかを探り、そこから、伝統仏教のみならず新宗教も含めた今後の日本の仏教の在り方を展望しようとするものである。

第一章：日本仏教の再生に向けて

◎祖先崇拜とは何か

そもそも、伝統的に日本人の心の拠り所となってきた祖先崇拜とは、どのような

ものであり、その趣旨・目的と仏教のそれとの本質的な違いは何なのかを検証しなければならないと思う。

その為には、先ず祖先崇拜の風習というものが日本に限らず本来農耕民族に共通の風習であったことと、そこに至るまでの原始の頃よりの人類の葬送儀礼の様子と死者との関わり方について見て行きたい。

○葬送儀礼の源流

日本における葬送儀礼の形跡は、古くは縄文時代にまで遡ることができるようである。

その趣旨・目的についてはまだ不明な点も多く今後の研究が待たれるところである。特徴的なのは、遺体の手足を折り曲げて縛ってあるものや、上半身と下半身を切断してあるもの、又、石を抱かせてあるものなど、死者が再びこの世に戻って来ないようにとの思いが強く感じられるものが多いことである。その傾向は早期のものほど顕著な様である。そして時代が新しくなるにつれて、そのような死者に対する怖れだけではなく、死後の冥福を祈るいわゆる弔いの観念が発達してきた形跡も見られる。現代においても、死者を丁重に弔った後、火葬場からの復路を往路とは違った道を使うなどの風習が残っているが、これも弔いの気持ちとは裏腹に、死者が再び戻ってこないようにとの思いの表れであろう。

○死者に対する恐怖

このような、死者に対する一種の畏敬の念は、単なる文化風習というよりは、人間の深層心理に根ざすものであると思われる。つまり、菅原道真の例に見られるように、生身の肉体を持ち生きている相手に対しては、左遷でもなんでも恐れることなく対処できるが、ひとたび、死者となるととたんに、それは未知の力を持つ存在として怖れ敬う対象となるのである。

それは、人類にとってはおそらく普遍的な感覚であり、現在でも、辺境の地で世界宗教等の影響をあまり受けていない未開部族の間には、そのような死者に対する怖れとそれを反映した風習が広く残存している。

オーストラリアの原住民やパプアニューギニア諸島・フィジー諸島・アメリカインディアン・エスキモー・アフリカの諸部族・アジア各地の山間諸部族などの間には、死者が出ると、それまで死者の使っていたベッドに荷物や死者の嫌がる棘のある植物を置いて、家に居座ることが出来ないようにしたり、家の壁をたたいて大きな音を出して、早く家から追い出そうとしたりする風習がある。そうやって死者を追い立てながら家から埋葬地まで追いやり、その上で、今度は死者が埋葬地から村まで再び戻って来られないように、わざわざ死体の足を潰したり、縛って埋めたりする。さらに、埋葬地からの帰り道には、棘のある植物や様々な障害物を置いたり、

死者が苦手とされる水を障害物として利用するために、川を渡るときはわざと橋の無い所を渡るなど、死者が絶対に後をついて来られないように、入念で手の込んだ策を練った風習が数多く残っている。彼らが、どれほど死者を恐れているかが伺える。^①

このような風習は、元はと言えば、死体が朽ち果てていく異様な姿に対する嫌悪感を発端として、もはやゾンビのような存在と化した気味の悪い恐ろしい死者が、再び生活現場に戻ってきて、生きている人間たちに様々な影響を及ぼすかもしれないという、ある意味妄想的な恐怖心に起因していると思われる。そのあたりの人間心理は、日本の古事記の黄泉の国の説話などにもよく反映されているように思う。

いずれにしても、人間は、姿が見えない存在に対しては、必要以上の恐怖心や畏敬の念を持ってしまうものである。そして、そのような目に見えない存在に対する恐怖心は、しばしばその裏返しとして、相手の力を過大評価して、時にはその力に頼ろうという性向さえもたらすものである。

目に見える存在であっても怖い相手に対しては、そのご機嫌をとって自分に危害を加えずに、むしろ守ってくれるようにお願いするような性向を人間はもともと持っている。暴力団にみかじめ料を払うのは、その典型であろう。それと同様に、目に見えないもっと怖い存在に対しては、あの手この手を使ってどうにかして、そのご機嫌を取ろうとするのは、むしろ当然と言えば当然であろう。

○自然宗教の源泉としての人間心理

上記のような死者に対する畏敬の念と同様に、人類が未だ文明を持たない段階においては、狩猟にしろ農耕・牧畜にしろ、あらゆることが自然現象に左右されていたため、それら目に見えない自然現象を左右する存在を想定し、生贄を捧げるなどのさまざまな儀礼を通じて、それらの目に見えない存在に良好な天候と自分達の生活の保障を願ったものと思われる。

逆に、悪い出来事は、それら目に見えない存在が怒っている現われであるとして、急遽供物を捧げるなどの儀式を行いご機嫌を鎮めようとしたのであろう。このような風習は洋の東西を問わず、人類に普遍的に見られたようである。

人間は本来的に、原因不明の現象に対しては物理的な対処の仕方が分からない為に、恐怖と不安を抱く。そして、その原因を物理的世界の背後にある目に見えない存在に求める傾向をもっているのである。^②

要するに、人類は原始の時代より、目に見えない存在をある時は恐れ、ある時はそれに頼り、ある時はそこに災いの原因を求めるという風に、自分達の弱さ故に、自分達を越える能力を持つと信じるものに対する期待と不安を動機としてさまざま宗教的儀礼を発達させてきたものと考えられる。

特に、土着型生活形態では、身近な生活環境の中で自分のたちの理解やコントロ

ールの及ばないものは悉く信仰の対象になっていき、その中には、もはや目に見えない存在となった自分達の先祖達も含まれていたものと思われる。

当初は恐怖の対象として忌避するのに必死だった死者に対しても、やがては彼らをただ怖れるだけでなく、何らかの捧げものをしてそのご機嫌をとることによって、自分たちに災いをもたらさないだけでなく、出来れば守ってもらいたいとお願いするようにもなったようである。

そして、そのような宗教儀礼は、人類が自ら能動的に獲物を探して食物を得る狩猟採集を中心とした生活をしているときよりも、農耕技術を習得し、作物の生育具合がより一層自然現象に大きく左右されるようになるのに比例して発達し、その重要度も増していったものと考えられる。

自分たちの力の及ばない自然現象をコントロールしているであろう目に見えない存在に対する、畏敬の念と期待感はますます大きくなっていったのであろう。

○農耕と祖霊信仰

人類が農耕技術を習得し、一定の土地に定住するようになると、自ら開墾した土地の所有権とそれを管理する必要性和権限というものが生まれた。

そのような土地の所有権と管理の権限は、親から子へと世襲され、子の中でも第一子に相続され、第二子以下の子達は第一子の権限に従属する労働力となるか、新たな土地を開墾してその土地の管理者となるというようなシステムが確立されていた。

そのような権限を相続した子孫からみれば、それらの生活手段を自分たちに与えてくれた土地の開墾者である先祖に恩義を感じ、彼らに感謝した。そして、それら先祖たちは死後も自ら開墾した土地とそこでの作物の生育状況を気にかけ、それに影響を与える自然現象をコントロールするか、もしくはコントロールしている自然神への橋渡し役を果たしてくれていると信じた。つまり、彼ら先祖の気持ち次第で作物の生育状況も変わってくると、子孫たちは信じるようになったのである。現在でもそう信じている部族は世界各地に居る。

そこで、子孫たちは、それら先祖たちをお祀りし、敬意を表し、機嫌を損ねないように細心の注意を払うようになった。そして、やがては作物の生育状況だけでなく、日常のあらゆる出来事は、彼ら先祖のご機嫌によって左右されており、事故・災害・病気などは、先祖に対して何か無礼があつて、それで先祖が怒っている結果だとして、あわてて、捧げものをするなどして先祖のご機嫌を取ろうとするような風習が確立されていった。

西アフリカの Tallensi 部族などでは、現在でも先祖に対して誠意を尽くすことが重視されており、それとは裏腹に、あらゆる災いは先祖に対して礼を逸した証拠であるとも考えられている。彼らは生活一般での礼節を重んじ、子孫として先祖の名

を汚さないような誇り高い生き方をすることが彼らにとっての行動規範となっている。^③

このようにアジア諸国だけでなく、現人類誕生の地とみなされているアフリカ各地の農耕部族にも、このような祖霊信仰の風習は一般的に見られることから、おそらく、もとは現人類の農耕部族にとっては普遍的な風習であったと推測される。それが、一神教的な世界宗教等の普及により、現在ではむしろ限られた地域の風習となってしまったものと考えられる。

これら各地の人類に現在でも散見される祖霊信仰の特徴は、祀られる先祖は、当初は亡くなった父や祖父などの個人としての霊ではあっても、それらの個々の先祖たちも年月を経るうちに、より大きな概念である集合名詞としての「祖霊」の中に溶け込んで行く。

そして、そのような集合的「祖霊」は、もはや人間の域を超えたある種の「神」的存在になっており、自然現象や子孫の運命までをコントロールする存在へと昇華されていることが多い。

日本におけるいわゆる春には田に下り「田の神」となり、秋には山に戻り「山の神」になるとされた存在や、後代には「氏神」とされた存在も、元をたどればすべて、上記のような集合的な「祖霊」であったものと思われる。^④

このような集合的「祖霊」という観念は、前述の西アフリカの Tallensi 部族にはもちろん、タイの少数民族の黒タイ族^⑤など、たまたま学術的調査が行われた祖霊信仰を持つ部族に限っても、地理的要因や文化背景に関わりなく、必ず見られるもので、ほぼ共通した観念の様である。

このように、子孫によって正しく祀られて満足している集合的「祖霊」は、子孫の繁栄の為に尽力してくれるわけだが、子孫の態度に納得していない祖霊や正しく祀られていない亡者は子孫に様々な災いをもたらすとも考えられた。また、死んで間もない霊は、荒々しく彷徨っているものが多いと考えられ、怖れられた。このような災いをもたらす者としての死者への恐怖は、上述した原始のころよりの死者に対する恐怖を引きずったものであり、祖霊信仰の儀礼が確立した後も、あとあとまで、生者を悩ますものとなった。

○シャーマン権威主義の発祥

そこで、そのような怒っている祖霊や彷徨っている亡霊の言い分を聞きとり、対処法を生きている人々に伝えたり、それら亡霊を鎮めたりする能力を持つとされたシャーマンが重要な役割を果たすようになったものと考えられる。

先に述べたように、人類は原始の時代より、理解やコントロールの及ばないもの又は容易にコミュニケーションできないものに対して、怖れと不安を抱き、その裏返しとして、すがる様な期待感を抱いてきた。そのような一般の人間の無力感ゆえに、

それら目に見えない存在とコミュニケーションできるとされる所謂シャーマンに人々は期待を寄せ、それに頼るという構図が出来上がった。

そして、それは今でも、現代社会における様々な宗教事情を考える上で見過ごすことの出来ない大きな要素の一つと成っていると考えられる。そのような、人々のシャーマンに対する過剰な期待と依存の構図をここでは仮に「シャーマン権威主義」と呼んでおきたいと思う。

○日本的祖霊観の成立

以上みてきたように、今日の日本で見られるような様式化された先祖祭祀の伝統の底流には、上記のような古来の祖霊信仰がそのベースとしてあり、欠くことのできない前提になっていると筆者は考える。

ちなみに、祖霊と子孫または死者と生者との関係には、生活環境の厳しさが色濃く反映されていると考えられる。生き抜いていくことが容易ではなく、様々な災害や病気に絶えずさらされているような生活環境に於いては、その関係もより厳しいものとなる。死者も含めたさまざまなものが災いの原因とみなされやすいからである。その証拠に、現在でも死者を極端に恐れる風習が残っているのは、生活環境が極めて厳しい地域の未開部族に多い。

逆に弥生時代以降の日本の様に、気候が温暖化し豊かな自然環境に恵まれはじめた地域においては、自然及びその一部と化した祖霊と、生ける人間達との関係もより友好的で一体感を伴ったものへと変移して行ったようである。その傾向は不安定な狩猟生活からより安定した農耕生活へと移行していくにつれて強まっていったと思われる。そしてやがて自然環境・祖霊・生きる人びとが一体となった生き生きとした山海村落共同体的世界観が形成され、それがその後の日本の風土文化の底流となって行ったものと思われる。

このような、日本古来の宗教観・祖霊観の上にその後の儒教・仏教などの外来文化が重層的に積み上げられて行った結果、今日まで伝わる日本独特の宗教観と先祖祭祀の伝統が出来上がっていったものと考えられる。

○生活保障の為の祖霊信仰

ここで確認しておきたいことは、先に見たような世界各地の農耕民族に原始の頃より見出される祖霊信仰は、その目的とするところは、「安定した食料供給と生活の保障」であったということである。そして日本に於いても、そのような祖霊信仰は、仏教伝来以前から存在していたものと推測される。

この古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」ということと、仏教の教えや目的は、本来縁もゆかりもない、まったく異質で、次元の違うものであったことを、忘れてはならないと思う。

なぜなら、このことが、仏教が日本で普及していく過程で、そして、現在に於いてもなお、大きな誤解と混乱のもとに成っていると筆者は考えるからである。

○仏教伝来とその日本的受容の内実

日本には6世紀の中頃に仏教が伝えられた。前述のような人間の願望と不安心理に起源を有すると考えられる自然発生的な原始自然宗教とは異なり、仏教は釈尊という叡智と慈悲を極めた類まれなる賢人によって示された思想体系である。

釈尊は我々に、自ら縁起の理法を悟り、あらゆるものの相互依存的な関係性を自覚することにより、自他の分断の虚妄と我執の克服を期して、我執とは反対の方向性をもつ万物に対する限りない利他の行と弛まない自己陶冶の道を歩むよう説かれた。

それは、理解やコントロールの及ばないものや、目に見えないものに対する恐れや不安そしてその裏返しとしての過剰な期待という人間の不安心理に基づく信仰形態とは対極を成す立場にあるといえる。

つまり、現実と正面から向き合い、あらゆる現象の因果関係を見極めることによって、理解できないもの・コントロールできないもの・目に見えないものに対する恐れや不安は克服され、何ものも恐れることなくましてそれに頼ることもなく、ひたすらに現象の背後にある原理に対する理解を深めていこうとする道であると言える。

そして、そのような原理に対する理解つまり縁起観を深め、それを他者とも共有することによって、そのような縁起観に対する無知に起因する苦の状態から皆共に脱却していこうとするのがいわゆる菩薩道であると言える。

このように、日本に伝えられた大乘仏教は本来上記のような菩薩道を教えるものであったはずだが、現実の人々の関心は前述のような恐れ・不安の解消と願望の成就の方により多くの比重が占められていたと言えよう。特に平安時代までは、仏教の教理よりも、加持祈祷などの超自然的な力によっていわゆる現世利益的な成果を求められることが多かったようである。そして、より靈驗新たかな僧侶のほうが重宝された。そこには古代社会においてシャーマンが特別な權威を持っていたのと同じ構図が伺えるわけである。

仏教が、一人一人の生き方に指針を与えるというその本来的な趣旨をもって民衆に布教され始めたのは鎌倉新仏教以降であろう。鎌倉新仏教の祖師たちや既存の仏教の改革者たちの多大な努力によって、仏教はその教理と実践体系を伴った形で民衆レベルにまでもたらされようとしたと言える。しかし、殆どの民衆が文盲であった時代においては、その努力にも限界があったのと、民衆の側が宗教としての仏教に求めていたものと、仏教者達が民衆に伝えようとしていたことに残念ながら大きなギャップとずれがあったことは否定できないように思われる。

この民衆側と仏教者側の大きな思惑違いの結果、日本に於いての仏教は、民衆のニーズに合う部分だけが民衆側の解釈によって取り入れられ、本来の仏の教えも、大乘仏教の理想たる菩薩行も浸透しえなかったと筆者は考えものである。

そこにこそ、今日に至っても、伝統仏教に於いてだけでなく、近年の新宗教によってでも、本当の意味での仏の教えや大乘の菩薩行が、人々に伝わっているのか？という大きな疑念の根本的な原因があると思われる。これから、その辺りの事情をやや詳しく検証してみたいと思う。

○儒教の影響

日本には、仏教が伝えられたのとはほぼ同時期、あるいはその少し前に、儒教が伝えられた。そして、その当時から公務員の一般教養として学ばれていたようである。

今日までに伝わる日本の葬送儀礼の伝統の中には、儒教に取り入れられた中国古来の宗教観の影響を受けたと見られるものが少なからずある。端的な例が、位牌である。インドにはもともと位牌を祀る風習などどこにもなく、明らかに中国で確立された伝統が日本に伝わったものと思われる。

儒教的伝統では、陰陽説に従い、人は死後、魂と魄（はく）とに分かれ、魂は陽に従って天に昇り、魄は地に降り、陰に従うとされた。このため魂は位牌にまつり、遺体は土に埋めて土葬とした。そして死者は、死後も生前と同じように生活すると見なされていた。このように、死者の魂を位牌という形で祀ると言うのは明らかに儒教的な伝統であることが伺える。^④

○祖霊信仰を前提とした日本の先祖祭祀（祖先崇拜）様式の形成

このことから、日本における先祖祭祀（祖先崇拜）の伝統は、日本古来の祖霊信仰と儒教的な葬送儀礼、それに仏教的な経の読誦というものが混合して形成されたものと思われる。

仏教における読経の伝統は、もともと経典というものが編纂される以前から釈尊の教えは口伝で伝えられ、絶えず声に出して誦せられ、時には吟遊詩人のように、多くの人にその内容を聞いてもらうという趣旨もあったようである。

従って、僧侶が経を読誦して、その声が届く範囲の一人でも多くの衆生の覚醒を促そうという趣旨は極めて大乘仏教的な発想であると言える。しかも、その対象には生者・死者の差別はない。なぜなら仏教的世界観では、その人の生死の状態に関わらず覚醒されるべき衆生であることには変わりがないからである。

しかしながら、そのような大乘仏教的な発想から死者を供養するのであれば、縁のある全ての人が供養の対象になるはずである。つまり、先祖といっても父方・母方両方の先祖全てが供養の対象になるはずなのである。ところが、日本の先祖祭祀の伝統では、父系の先祖のみを祀る事になっていた。これは、あきらかに仏教的な

発想とは矛盾する。なにか非仏教的な理由によることは明らかである。一つには儒教の伝統が反映されているとも言えるかもしれないが、それ以上に、古来の祖霊信仰そのものの伝統が反映されていると筆者は考える。

先にも述べたが祖霊信仰の目的は「安定した食料供給と生活の保障」であり、祖霊を崇拝するのは、その見返りとして自分達の生活を保障してもらうためであった。そして、ここでの祖霊とは、自分に繋がる全ての先祖を含む概念ではなく、あくまで自分達が受け継いだ生活手段の開祖に繋がる系譜の先祖の集合体を意味した。

このようなある特定の先祖を開祖とする生活手段とそれに依存する集団およびそれを後代に引き継いでいく一連の枠組みとその系譜が、日本における「家」と呼ばれるもの本質であった。

従って、日本の祖先崇拝において祀られるのは生活手段を継承する「家」に繋がる系譜の「祖霊」であり、当然ながらそれは父系か母系かのどちらかでなければならなかったのである。^⑦

もし、父系と母系の両家の先祖を対象とするとなると、それは際限なく遡れることになり、究極的には全人類共通の祖先にまで遡ることになる。しかし、本来の祖霊信仰の趣旨は上述のように自分達に生活手段を与えてくれた開祖から始まる始点のある特定の世襲の系譜に感謝し、それを崇拝する儀礼であるため、儀礼の対象が無限拡散しては趣旨に反するのである。

このように、古来の日本人にとっては、先祖から受け継がれてきた生活手段の運営母体である「家」を存続させることが最重要課題であり、祖先崇拝はその為の儀礼であったため、他の何よりも優先されたものと考えられる。したがって、仏教者達がどのような影響をあたえようとも、その日本古来の伝統と考え方の本質が覆ることはなかったと筆者は考える。

○仏教の影響とその浸透の限界 —祖霊信仰の手立てと化した仏教—

とは言え、仏教が日本人の死生観や世界観に多大な影響を与えてきたこともたしかである。

古来、日本人にとっての死後の世界は深い山の中や海岸付近にあり、死んだら山や海岸に帰って祖霊に融合すると信じられていた。個々の先祖は時が経てば自然に祖霊に溶け込むものであった。そして祖霊は、深い山や海岸ではあってもいつも郷土の傍に居り、季節によって山と田畑を行き来するぐらいだった。つまり、人は死んでもこの世に居たのである。この世とは全く別の世界としての「あの世」などなかったのである。

そして、祖霊となった先祖は、いつも子孫の傍に居り、きちっと祀れば子孫を守ってくれるが、機嫌を損ねると場合によっては子孫の命まで奪う強く威厳のあるちょっと怖い存在として畏怖された。また、誰にも祀られなかった死者や変死した死

者は祖霊になることはできず、永遠にこの世のどこかを彷徨い、時には生者に悪さをする厄介な存在として疎んじられた。

日本古来の、自家の祖霊を祀る風習以外の不特定多数の亡者を対象に供物をそなえる風習なども、元をたどれば、このような祖霊になれなかった亡者に対するものであったと考えられる。

いずれにしても、人は死んだら、郷土の傍で集合的「祖霊」に融合するか、もし祖霊になれなかったら、この世のどこかで永遠に彷徨い続けるというのが、古来の祖霊信仰の死生観であった。

しかし、仏教の影響により、死者は一人ひとり自分の行いによって、極楽に行ったり地獄に落ちたり、あるいはこの世に彷徨ったりすると考えられるようになる。

つまり、本来集合的概念であった「祖霊」は一人ひとりの先祖に解体され、死んだらこの世からはるかに離れた完全に別世界の「あの世」に行ってしまうという考え方が仏教によってもたらされたのである。

また、仏教僧達は「あの世」に行き切れていない「この世」に執着のある亡霊に経を聞かせて、迷いから目覚めてもらい、なんとかして「あの世」に行ってもらえるように努力した。この彷徨っている亡霊を結果的に鎮めることが出来る仏教僧の能力というのは、古代の日本人にとっては大きな魅力であったに違いないと思われる。^⑧

なぜなら、前述のように、日本だけでなく世界中の祖霊信仰のある所ではどこでも、祖霊になれなかった亡霊をどうするかが厄介な問題とみなされているからである。通常は、村のシャーマンが力づくで追い払う場合が多いようであるが、先にあげたタイの少数民族の黒タイ族の祖霊信仰についての調査研究でも、元々黒タイ族ではない異民族出身の者が、死後黒タイ族の祖霊の仲間入りすることが出来ず、行き場を失って困り果てているという窮状をシャーマンを通じて訴えてきたのに対して、子孫である長男の警察官が、仏教の僧侶にお願いして、輪廻転生の道筋をつけてもらったという逸話が紹介されている。

つまり、従来の祖霊信仰の伝統では、目的外で言わば対応が手薄であった部分を補完するものとして、上記の現代のタイでの逸話のように、古代の日本に於いても仏教や仏教僧に期待がよせられたということであろう。そして、仏教僧側も積極的にその期待に応えていったとも推測される。しかし、それによって、日本古来の祖霊信仰の伝統や目的が、仏教的考え方に全面的に取って代わられることはなかったようである。

仏教僧側も、本来の仏教の目的が、死者も含めて一切衆生を、迷いから目覚めて仏の道を歩むように、導くことであることを熟知していたはずなので、その様に行動し、また民衆にもそのような思想を広げようと努力していたに違いない。

しかし、それを受け取る側の一般民衆の方は、そもそも自分達が迷える民である

とは実感していないし、死者も自分達に災いをもたらさないようおとなしく鎮まってくれば良いのであって、自分達や死者が仏の教えに目覚めることなど二の次であったと思われる。

つまり、古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」ということの為に、仏教や仏教僧が有用であると判断された範囲内に於いてのみ、その手法や儀礼方式が取り入れられたと考えるべきであろう。

しかし、それは前述のように仏教が日本人の死生観や世界観に大きな影響を与えたということを否定するものではない。

特に、浄土系の諸宗派による阿弥陀仏の名前を繰り返し唱えることによって、死後、阿弥陀仏の世界である極楽浄土に往生できるという教えは、死後の落ち着き場所としての新しい展望を日本の民衆にもたらしたと言える。

ただ、それら浄土系の教えが普及した背景には、本来の日本の民衆が受け継いできた古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」ということが現実的には実現不可能な程厳しい社会情勢になってきたということがあったのではないと思われる。そして、現実の生活に安定を求めるよりあの世での生活に望みを託さざるを得なくなったと考えられる。

このように仏教が日本人に多大なる影響を与えてきたことは確であるし、上記のように、人々がこの世を末法であると感じるような社会状況に於いては、相応の魂の救済の道を提示してきたことも確かであると思う。

しかし、大多数の日本人にとっては、祖霊信仰または祖先を崇拝することの目的は、「家」の末長い存続であり究極的には、「安定した食料供給と生活の保障」であったことには変わりなく、仏教の説く、先祖も含めた全ての人が仏の教えに目覚めるべしという思想が、一部の熱心なサポーターを除いては、広く日本人一般に浸透することはなかったと言えよう。

このように、日本の仏教は、男系中心の家の存続という日本古来の祖霊信仰の伝統と儒教的な影響を受けた先祖祭祀の伝統の中で、死者の供養という限定的な役割を担わざるを得なかったのであり、逆にその様な限定的な役割が、日本の社会の中での仏教の主要な役割として見なされてきたことが、今日の檀家離れなどによるその将来的存続の危機の問題の遠因になっていることは否定できないように思われる。

つまり、本来の仏教の目的は人々の教化にあったはずであるにもかかわらず、その本来の目的よりも、むしろアルバイト的な業務の方が主要な業務になってしまい、収入源にもなっていったことが問題の本質であるように思われるわけである。

戦後、欧米の個人主義の思想が日本社会において普及し、同時に市場経済化によって都市化がすすみ、従来の伝統的な家制度とそれに依存してきた檀家制度が、立ち行かなくなってきた今、仏教界は、改めて、その本来の使命を再確認しそのあり方を見直す時期に来ているのではないかと思うものである。

◎ 仏教思想による先祖祭祀のあり方の見直しの必要性

○日本の仏教の再生に向けて

では、どうすれば良いのであろうか？現状を鑑みても、生活慣習としての先祖祭祀が人々と仏教との接点になっていることは動かしがたい事実であるし、現状では先祖祭祀の慣習すらも廃れつつあるとは言え、急激に無くなる訳ではないので、今後も先祖祭祀が人々と仏教との接点でありつづけることには変わりがないと思われる。むしろ、先祖祭祀という接点を抜きにして、まったく新たに仏教が人々との接点を見出そうとすることの方が今の現状では未だ非現実的であるように思われる。

そういう現状を考えると、仏教思想が本当の意味で人々の生活の場に浸透し、人々によってその教えが理解されるようになるには、現状の先祖祭祀を純仏教的な発想によって見直し、そのあり方を変えていくしかないのではないかと思われる。では、仏教的な先祖祭祀のあり方とはどのようなものであろうか？

先にも述べたが、仏教には経の読誦という伝統があり、それは、自分が仏の教えを習得するという目的に加えて、自らが声を出して唱える経の内容を他者とも分かち合いたつまり仏の教えを他者にも供養したいという思いを込めて行われるという意味合いもあり、いわゆる菩薩行としての側面も持つものであった。そう言う意味では、仏教的な先祖祭祀とはそのような菩薩行の一環でなければならないであろう。

具体的には、自らに命をもたらしてくれた人々つまり先祖との繋がりに思いを馳せ、その恩に感謝し、その恩返しの一環として経の読誦をもって仏の教えを先祖に供養するという形になるであろう。その場合に、忘れてはならない事は、自らに命をもたらしてくれたのは、父方のみならず母方も含めた父母双系の先祖全てであるということである。

父と母との因と縁によって自分という存在が生まれたのであり、自分自身の存在の因縁を考える上でも、父と母と彼らに繋がる双系の先祖というものが自身の存在のあり方に大きな影響を及ぼしていることは言うまでもないことである。そういう意味では、自らの命の源である双系の先祖に思いを馳せるという事は、自分という存在のあり方を振り返ることにもなる。そして、共に仏の教えに目覚める事を期して、自らと彼らに経を読誦することは、時間的な因と縁との繋がりの中での広い意味での自分（達）全体が仏の教えに耳を傾けるということになるのである。

従って、仏教的な双系の先祖の供養というものは、従来の伝統的な先祖祭祀とは全く発想の異なるものになるであろうし、その違いを明確にしていくことが何よりも大切なことであると思われる。

これも既に述べたが、日本における伝統的な先祖祭祀（祖先崇拜）は父系主義であり、母系の先祖は対象外となる。祖先崇拜に於いては、主体は個人ではなく「家」

であり、その家を守護する「祖霊」としての先祖を祀るのであり祖霊とはその家の開祖である父系に連なるものなので、当然の事として父系主義になるのである。

つまり、先祖祭祀のあり方が父系主義であること自体が、その目的が家を主体とした祖先崇拜であることの証左であり、本来そこに仏教が入り込む余地は無かつたはずなのである。それが、先にも述べたさまざまな歴史的要因により、結果的に仏教僧がそのような非仏教的な先祖祭祀の一翼を担うことになってしまったことが、仏教がその独自性を発揮できなくなってしまった大きな要因であるように思われる。

家の末長い存続を目的とした祖先崇拜の儀礼の中に、いくら仏教的なフレイバーを取り入れても、根本的な矛盾を拭うことはできず、そもそもの趣旨・目的の違いを乗り越えることは所詮不可能であったと思われる。

従って、今後仏教が本当の意味で主導権を取り戻し、純仏教的な菩薩行としての先祖の供養を人々に奨励していくには、大前提として先ずは、伝統的な祖先崇拜と仏教的な先祖の供養との本質的な発想の違いを明確にし、それを周知徹底することであろう。その違いを明確にするためにも、先ずは祖先崇拜の象徴である父系主義を捨てて、双系の先祖の供養にすることが仏教的発想であることを示す為にも欠かせないと思われる。

また、もう一つ重要な点として、仏教の本来の目的である、人々に仏の教えを自ら自覚してもらうという理想を実現するためには、これまでのように僧侶が経の読誦を肩代わりするのではなく、上述したように、在家の人々各々が父母双系の先祖とのつながりに思いを馳せ、共に仏の教えに目覚める事を期して自ら経を読誦するという形態にすることが望ましいと思われる。僧侶が在家の人々の菩薩行の実践を奨励し、その指南役としての重責を果たすことは、今後の日本における仏教の普及に欠かせないと筆者は考えるものである。

このような、実態が日本各地の寺院と檀家において当たり前のように出来上がってくれば、誰もが自覚を持って菩薩行としての仏の教えを自ら積極的に実践するという大乘仏教の理想が実現するのも夢ではないかもしれない。

○仏教系新宗教の問題

では、先祖祭祀の儀礼を双系の先祖の供養にするだけで、純仏教的な実践体系に成りうるのか？又、いっそのこと先祖祭祀の儀礼は捨てて、自分と仏とが直接向き合うという実践体系にすれば、本来の仏教になりえるのであろうか？

興味深い事に、戦後急速に普及した仏教系新宗教は、上記のような2大潮流に分類できるともいえる。しかし、残念ながら、どちらの流れにも顕著なのがいわゆる「現世利益主義」であり、それは他でもない古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」を言い換えたにすぎないものであった。

つまり、一部の仏教系新宗教が唱導した菩薩行としての双系の先祖の供養も、そ

の実態は、僧侶に頼らず「自分でできる祖霊信仰」として受け入れられ普及したと言っても過言ではあるまい。

また、自分と仏とが直接向き合うことを標榜した団体においても、実態は、「祖霊」が「仏」に置き換えられただけで、その目的とするところは「現世利益」つまり古来の祖霊信仰の「安定した食料供給と生活の保障」という目的をそのまま引きずるものであったことは否定できないであろう。

つまり、どちらも、姿を変えた「祖霊信仰」の延長であって、仏教の菩薩行とは言い難い実態であったと思われる。「疑似祖霊信仰」に幾ら沢山の人を勧誘しても、仏の教えを普く一切に及ぼしたことにはならず、従って仏教の菩薩行とは言い難いからである。

このように日本における伝統仏教の受容のされ方と同じように、新宗教も、本来の各教団の思惑に関わらず、受け取る側の日本の民衆のニーズと理解できる仕方でのみ受容されて行ったものと思われる。つまり、日本の民衆は「祖霊信仰」にしか馴染みが無く、どのような教えもそれを受け取る段階で、祖霊信仰に変容させてしまう傾向があったのであろう。逆にいえば、そうしなければ民衆に受け入れられなかった、又は受け入れられるには、彼らに好まれる言い方をするしかなかったという事情があったものと思われる。次の章では、その辺りの経緯と、今後それらの仏教系新宗教が真の仏教の担い手になって行くにあたっての、必要条件について検証していきたい。

<参考文献>

- ① James George Frazer : *The Fear of the Dead in Primitive Religion*
Ayer Co Pub; ISBN: 040509566X ; Reprinted (1971/01)
- ② David Hume : *Natural History of Religion*
Oxford Univ Pr; ISBN:0192838768 (1999/01)
- ③ Meyer Fortes : *Pietas in Ancestor Worship*
The Henry Myers Lecture, 1960
<http://www.era.anthropology.ac.uk/Ancestors/fortes1.html>
- ④ 柳田国男 : *先祖の話* (柳田國男全集 13)
筑摩書房; ISBN: 4480024131 (1990/04)
- ⑤ 小野澤ニッタヤー : *タイ国黒タイ族村落における祖先崇拜*
東京家政学院筑波女子大学紀要第1集 93~ 104 ページ 1997 年
- ⑥ Marcel Granet, 栗本 一男 訳 : 「*中国人の宗教*」
平凡社; ISBN-13: 978-4582806618 (1999/10)
- ⑦ 竹田聰洲 : *祖先崇拜—民俗と歴史*
平楽寺書店; ISBN: 483130008X (1957/10)
- ⑧ 池上 良正 : *死者の救済史—供養と憑依の宗教学* 角川選書 354
角川書店; ISBN: 4047033545 (2003/07)